

清田中全中参戦記 ～女子、3度目の挑戦～

札幌市立清田中学校 高橋和也

おかげさまで今夏、清田中学校は女子が3年連続11回目、男子が12年振り2回目の全中出場を果たすことができました。男女同時全中出場は、平成7年の江別大会における大麻中以来18年振りの出来事です。この大会に私は審判員として参加していましたが、快挙を目の当たりにし、当時の大麻中のコーチだった大浦先生の指導に感動しました。

それから18年、多くの方々のご支援や幸運にも恵まれて、おかげさまで清田中学校もこの快挙を達成することができました。その後、ジュニア連盟広報委員会より恒例の「全中参戦記」の寄稿をお願いされました。担当の方からは「男女いっしょでかまいませんよ。」と言われたので、最初はそのつもりで執筆を始めました。ところが、どうにも話がうまくまとまりません。どうやらわたしの頭の中では男子は男子、女子は女子という2つの別回路があるらしく、それらが同時に連動するのは無理なようです。よって、ご厚意はありがたく受け止めながらも、男女別に寄稿させて頂くこととし、まずは手始めに女子から執筆いたします。

1. マクロでのチーム作りの構想

チーム作りに当たって、入学当初から活躍し、2年生ながら既にスタメンの座を射止めていたPGの池田とセンターの栗林、そして1年生ながら栗林とのハイローで中体連でも活躍した藤原を配置するのには何の迷いもありませんでした。あとは残り2人を誰にするか。テーマがある程度絞られたので、池田・栗林の代で清田緑小が全道ミニを制覇していることからしても、彼女たちと同学年の選手をスタメンに連れて、2年生4名、1年生1名というラインナップでいくのが無難か…と当初は簡単に考えていました。目指すは、ジュニア期における強さの定義とも言える「試合開始からエンジン全開で相手を圧倒し、総得点で70～80点以上を平気で取る破壊力のあるオフェンスと、失点を常に30点台に抑えられる強烈なディフェンス」のできるチームです。

スタメンに私がこだわり、チーム作りの主要素とする大きな理由は、中学校の試合時間にあります。1ピリオド8分×4という試合時間は、一般の試合とは違う短期決戦であり、試合の流れはどちらにも1回程度しかないと考えられるからです。となると、いくら選手交代が自由だとは言っても、スタメンの出来不出来が試合を大きく左右します。スタートダッシュに失敗して、前半でもたついた試合運びをしていると、たちまち会場中にジャイアントキリングを期待する雰囲気が高まります。私も何度か手痛い目に遭っていますが、まだまだ精神的に未熟な中学生にアウェイ感漂うコート上で、本来の力を発揮しろと言っても無理です。もちろん、そんな状況も想定して、ありとあらゆる対策やシミュレーショ

ンを練って試合に臨むわけですが、一番良いのはそんな過酷な状況にならないようにすることです。そのために、前述した定義を体現すべくスタメンを決めていく必要があると私は考えています。

しかし、残念ながら当初構想したスターティングラインナップはなかなか上手く機能しませんでした。一生懸命に取り組んでいるのは伝わりますが、どこか空回り…。お互いの持ち味が発揮できずにちぐはぐなプレイばかりが目につきます。それでも「時間が経てばコンビネーションが熟成するだろう。」と楽観していましたが、10月になって新人戦札幌予選が始まっても今一つの状態が続きました。

特に気になったのは、立ち上がりでペースをつかめず、時には相手にあっさり主導権を握られて連続ゴールを許すような試合展開が下の回戦から多々見受けられたことです。そして、北星女子との決勝戦。突き放せそうで突き放せない嫌な流れの試合運びをしているうちに、終盤、怒濤の追撃を受けてあわや…といったところまで追いつめられました。

勝つには勝っているが、このままではおぼつかない。選手たちは口には出さないものの、全道3連覇へのプレッシャーを重たく感じており、相手の「当たって砕けろ」のチャレンジャー精神にはたじたじになっているように見えました。この最悪な状況を何とか打開しなければ、その内きつと足下をすくわれると考え、根本的にスタメンを作り変えることにしました。

「コート上では先輩も後輩もない。」と私も選手に言います。しかし、しっかりチーム作りをしていけば、1つ上の学年の選手の方が「経験値」「プライド」「意地」で確実に下級生を上回ります。だから、試合がのるかそるかの一番になった時こそ頼れるのは上級生なので、できればスタメンの過半数を上級生で占めるのが望ましいと思います。

ただ、新人戦札幌地区予選を終えた段階で、上級生主体の利は感じられませんでした。であれば、下級生であっても力のある選手をスタメンに抜擢し、その選手をバックアップする形で上級生を起用することもありと軌道修正することにしたわけです。

しかし、そうは言っても何の説明もなく頭ごなしにチームの方針を180°変えるのは中学生も納得しません。思いつきだけで選手起用を決めているかのような印象を与えれば、そこそこに不満分子を製造するだけになります。

そこで、何度も時間をかけてミーティングでチームの方向性を確認し、同時にどの選手にも等しくチャンスが与えられるようにプレイイングタイムを保障して、選手起用の根拠となるデータを徹底して収集しました。この作業は南大会が始まる直前まで続きました。

結果として、下級生ではありましたが、男子にも負けない高い運動能力をもつ宗形と、ミスが少なく堅実なプレイをする土岐をスタメンに起用することで、池田・栗林・藤原との期待通りのケミストリーが見られるようになりました。しかし、スタメンの3名(過半数)が下級生という布陣になり、いくら能力が高いとは言っても、1つ上の学年の選手と戦うことによって蓄積されていく疲労の問題。さらには、上級生ほどチームへの思いの強さがないこと。そして、お互いに意地の張り合いのような試合展開になったときに見せられる

プライドと言ったものには、若干の不安を残しました。そんな中でチームは再始動していったのです。

2. ミクロでのチーム作りの構想

幸丸ジュニア連盟名誉会長の言葉に「地区予選を勝って喜んだチームは全道で負ける。全道を勝って万歳したチームは全国で勝てない。」というものがあります。正に言い得て妙で、全道で勝つことを照準に置くのではなく、全国で勝つチームを創るべく日々の練習に取り組まねばなりません。しかし、一足飛びにそんなチームができるわけもなく、選手の勝ちたい意欲が高まった上で、ひたすら地道な練習に取り組んで「心・技・体」のレベルを上げていくことになります。

私は男子で6回(厚別北で3回、北海道選抜で3回)、全国大会に出場していますが、女子を指導するようになってから、その時には感じなかったバスケットボールの奥深さが見えてきました。特にファンダメンタルの重要性は男子以上です。

結局のところ、全国で勝つためにはボールの持ち方1つ、ストップの仕方1つをとっても疎かにはできません。ともすればいい加減になりがちな基礎の基礎とも言えるこれらの部分が弱いと、道外勢はかさにかかって攻めこんできます。かつて、北海道選抜と愛知選抜の試合を見たとき、ボールをキープすることができず、次々と奪われてしまう本道チームを見て愕然としました。

だからこそ、1本のシュートを決める以上に、簡単にボールを奪われないことに主眼を置き、これらの練習の重要性を選手に意識させて、日頃から試合を想定したスピードやパワーで取り組ませてきました。たとえそれが体調の悪い日であっても。どんなことがあってもベストを尽くす心構えがないと、苦しい試合で力を発揮することができません。それでなくても、北海道勢はあまりにも恵まれた環境で練習をしています。うだるような夏の暑さにも負けず、暖房施設がないため室内でも吐く息が白くなる冬の寒さにも屈せずに、道外勢は練習します。それに比べて我々は、暑いとは言ってもたかが知れており、真冬でもTシャツになれるような環境で練習しています。ハングリー精神がどちらに宿るかと言えばいうまでもないでしょう。しかし、これをハンデととらえるべきではありません。むしろ、これだけ練習効率が良い環境にあることに感謝をし、練習内容の質を向上させていくことが大事なのです。だからこそ、多少の体調不良をベストパフォーマンスができない理由にさせてはいけません。

また、女子で全国に行くようになってから改めて思ったことは「全国でも通用する速攻」「全国でも通用する1on1」「全国でも通用するディフェンス」ができないとダメだということです。これも、ともすれば「全国ではそう簡単に速攻が出ないから、むしろ…」とか「全国ではそう簡単に1on1では勝負できないから、ここはやっぱり…」などと考えがちですが、そうではなくて、全国で勝つことを目指すからこそ、全国で通用する「速攻」「1on1」「ディフェンス」ができなければダメなのです。そのために、細部に至るまで

こだわって練習に粘り強く取り組まねばなりません。そして、そんな苦しい練習を乗り越えた結果、大舞台で晴れやかに、さわやかに、いつも通りのバスケットボールを展開することができるのだと考えています。

最後に、この代のチーム作りでは避けて通れないことが1つありました。それは栗林という選手をどう育てるかということです。180cmオーバーでありながら、身体能力は高く、シュートタッチも良い。日本協会も注目する何十年に1人の逸材を預かったことは喜びでもあり、重圧でもありました。彼女を健やかに成長させて、次のカテゴリ(高校)へと進めていくことが、ある意味において私の使命だったと言っても過言ではありません。

ただ、良い選手を預ければ預かるほど、指導者は慎重になりすぎたり、選手に対しての遠慮が生まれるものです。やりすぎて大けがをさせたり、燃え尽き症候群にならないようという心配や不安がそうさせるのでしょう。かといって変に甘やかして、バスケットボールに最も大切な勤勉さや忍耐、謙虚、努力といった素地をなくさせて周囲から浮いたプレイヤーにするべきでもありません。そのあたりのさじ加減がとても難しいのですが、中1の終わり頃に「進路なんてどうでもいい。別にバスケットボールの強いところになんて行かなくてよい。」と彼女が私との面談でキッパリと言ったときは、正直言って目の前が真っ暗になりました。

それでも、彼女を中心に据えながらも、彼女に頼りっぱなしのチームにしないことにはある程度成功したと考えています。そして、彼女自身の努力も実を結び、日本屈指の長身選手でありながら速攻に先頭を切って走り、床を転がるルーズボールにダイブし、3ポイントを決められる選手になったことは試合を見られた方なら知っての通りです。ある意味、彼女の「心・技・体」の成長が、清田中学校の取り組みを象徴していると言ってよいのではないのでしょうか。

3. 全道新人から春まで

スタメンがようやく確定して迎えた12月から1月の全道新人大会は、安定した試合運びを見せることができました。また、控えにまわった上級生も大事な場面でシックスマンとしての活躍を見せてくれて、選手層の厚さを遺憾なく発揮して戦うことができたと感じています。

他チームが行う清田対策としては、PGの池田にフェイスガードでつくことがよく見受けられましたが、これは想定内の出来事なので、それほどパニックに陥ることはありませんでした。ただ、池田本人のメンタリティが崩れることがあったので、この辺りはかなり気をつけねばなりません。決戦大会準決勝の北星女子戦がその際たる例で、しかも池田が崩れた後の他のガード陣も総崩れとなって、一時は20点差以上つけていた試合がクロスゲームになってしまいました。

池田もある意味、栗林以上に配慮が必要な選手でした。キャプテンシーがあってチームの統率力に長けており、シューターとしての資質は十分。調子の波に乗ったときはセンタ

一ライン付近からでも軽々と決められる頼りになる存在です。しかし、その一方で気持ちに張りがないと、プレイの質が大きく低下してしまいます。そんな時はいつそのこと気持ちの張りが戻るまでベンチに戻した方が良いでしょう。そうすると途端にチームが浮き足立ち、前述した北星女子戦のようになってしまうわけです。さらに、早く池田に本来の心の張りを取り戻してもらおうべく、プレイの不甲斐なさを叱咤激励しても、心の持ちようが悪いとよい反応が返ってこず、ますます深みにはまっていくこともありました。いかにして池田の精神状態をベストに保つかというのが、指導者として、この代のもう1つのテーマでした。

全道新人を終えて1つの形ができた時、許されるならばここで道外遠征をするなどしてチームをもう一段あげる努力をしたいものです。しかし、決戦大会が終わるとすぐに北海道選抜や札幌選抜の取り組みが始まり、チーム練習がままならなくなります。他の都府県では、オールスターの取り組みを本格的にやるのはせいぜい3月ぐらいというところが多く、北海道ジュニアオールスター大会のようなものはありません。結局、その間に道外チームは自チームの強化をしていることを考えると、強い北海道を作る上では仕方ないことではありますが、忸怩たる思いがします。

しかも、選手によっては選抜チームでプレイングタイムをほとんど与えてもらえず、スタミナや試合勘、プレイのキレをなくし、自信を失って帰ってくることもさえます。選抜の取り組みが終わって、それらをまき直す作業を自チームでするときはちょっと切なくなります。私も連盟の人間ですが、選抜チームのあり方にはいろいろ考えねばならないことがあるように最近は思っています。

4. 春から中体連に向けて

選抜選手がチームを空けている間、戦力の底上げをチーム内で図ります。しかし、この代は2名の選手が2～3月にケガの手術に踏みきました。1名は1年生の今のうちに…ということでヒザの半月板の手術を。もう1名は副主将の吉田で、肩の脱臼癖を改善するための手術をしました。吉田は堅実なプレイと同様に、誠実な人柄でチームの精神的支柱でした。そんな彼女がプレイに復帰できるのは中体連予選が始まる頃…下手すると全道大会まで出られないかもしれないという診断が降りたのはチームにとって大きな痛手でした。が、しかし彼女が練習を休んだのは入院していた時期だけで、その後はプレイができなくてもチームの裏方の仕事を献身的に行ってくれました。そんな彼女のために、中体連では1試合でも多く試合をしようとチームの結束がより強固になっていったわけです。

年度が替わって4月に行われた北海道カップでは、藤浪に20点差で負けましたが、例年のようなボールを持てば即スティールされるという「ひったくり被害」に遭うことはありませんでした。課題は山積みでしたが、同時にある程度の手応えを感じました。しかも他の招待校である女川、八王子一には勝利し、道外チームへの気後れを感じることもなくなったのは大いなる収穫でした。

その後、札幌市春季選手権大会を終えた2日後に秋田へと出発。今年は全国各地のいろいろな大会から声をかけてもらいましたが、調子に乗ってあちこち出かけてお金をかけるべきではないと判断し、昔からお世話になっている東日本選抜琴丘大会に参加しました。松山(山形)、石鳥谷(岩手)、桜丘(宮城)、男鹿東(秋田)に勝利して優勝。さらに、その2週間後に行われた函館カップでも弘前四(青森)、盛岡白百合(岩手)に勝利。道外勢が持つ独特なリズムや雰囲気に関わることなく、自分達のペースで試合運びができるようになったことにはさらに大きな手応えを感じました。

5. 中体連札幌予選

昨年度の全中参戦記にも書きましたが、中体連札幌予選は侮れません。むしろ、全道大会と同じぐらいの気持ちで試合に臨まねば、勝てる試合も落としてしまいます。

しかし、中学教師にとって、学期末の何かと多忙な時期に大会は行われますので、油断すると仕事に追われて練習につけなくなります。この辺は日頃からの鍛錬でしょう。万難を排して練習につく努力を指導者はすべきです。「大会前ではないからいいか…」と考えて、普段から練習につく努力をしていない者が忙しさの波を乗り越えることはできません。

私は学校での空き時間は脇目もふらずに必死に仕事をして、放課後には体育館に飛んでいきます。「バスケットばかり」と周囲から言われぬように、普段の仕事を人一倍行った上でバスケットボールに打ち込みます。時には練習中に放送で職員室まで呼び出されることもあります。本人にそのつもりがなくても相当不機嫌な様子の私を見て、多少のことでは呼び出すのをやめようと同僚は思っているようです。また、何か相談事がある先生方は、必ず部活についている私を見つけるのは簡単なようで、体育館やトレーニングをしている場所にやって来て「今日、うちの学級でこういうことがあったのですが…」という報告を聞くことはよくあります。

さて、万全を期して臨んだ札幌予選でしたが、選手にはやはり「勝たなければならない」というプレッシャーが重くのしかかっていました。特に美香保体育館に会場を移してから行われたブロック決勝では、向陵中に土俵際まで追いつめられました。向こうの苦し紛れに放り投げたシュートさえ何本も決められたときは「負ける試合はこんなものか…」という嫌なイメージが脳裏をかすめました。しかし、プレッシャーに打ち勝った選手達が粘り強く戦い、大苦戦しながらも何とか勝利を収めることができました。その後の決勝リーグでも苦しい試合が続きましたが、辛うじて優勝することができました。その際のホッとした選手の表情から、「たかだか中体連」、オリンピック等と同レベルで語るなどと言っても、やはり想像を絶するプレッシャーと彼女たちが戦っていたことを感じ取りました。

全道大会にコマを進めることで安堵しましたが、札幌予選を終えて重大な問題が発生しました。スタメンで起用している宗形と土岐が、それぞれ元々抱えていた故障(宗形はシンスプリント、土岐は腰痛)がピークになってしまったのです。絶対に負けられないプレッシャーに加えた夏場の暑さ、そして美香保体育館の硬いフロアによって彼女たちの疲労感

極限にまで達したようです。1週間は安静、2週目から競技復帰に向けて調整に入る…という診断が降りました。幸い、札幌予選から全道大会までには十分に期間がありましたので、彼女たちは全体練習とは別のメニューを行わせ、回復を待ちました。

ところが、全員揃っての万全な練習ができなくなった分、いくら期間があるとは言っても「このままで大丈夫なのか?」「本当に2人は間に合うのか?」という焦りが生じてしまいました。しかも、それらがやがて不穏な空気となり、「練習のし過ぎ」「選手の将来を考えていない」という不満の声が一部からあがっていたようです。この時、外部コーチである津梅氏がかなり矢面に立って対応をしてくれたことに感謝しています。

6. 中体連全道予選

宗形・土岐が全道大会に間に合わない、あるいは間に合ったとしても本調子ではないことを想定して、全道大会に向けては3年生の三浦と船水を徹底して鍛えることがテーマとなりました。

2人とも清田ではスタメンではないものの、札幌選抜でも活躍した選手です。元々の力をさらに引き出すために、夏休みの練習はかなり追い込みました。2人とも数kgは体重が落ちたそうです。それでも、そこは3年生。「ツライ」「苦しい」といった泣き言は一切言わずに懸命に取り組む姿に、指導者として表向きは鬼の形相ですが、心の中では感動していました。もっと言うと、2人の頑張りを見て全道予選の勝利を確信し、大会開催地である函館北斗市へと入りました。

5月に開催された函館カップで、すでに体育館の隅々まで勝手はわかっており、その時と同じホテルに泊まることで選手が平常心を保つことは簡単だったようです(遠征に初めて着いてきた1年生は若干浮き足立っていましたが…)。また、旧知の友である附属函館中の朝倉先生のご厚意で練習会場を提供してもらい、調整はほぼ100%という状態まで仕上げることができました。

そして、いよいよ初戦。相手は旭川・神居東。マークしていたチームとのいきなりの対戦です。全道の抽選が決まってから、当然出場校のスカウティングを始めていくわけですが、今回こそその重要性を感じ取ったことはありませんでした。私が持つ神居東・高島先生のイメージは「スクリーンプレイを中心に手堅く粘り強く攻める」というものでしたが、入手した映像はそれまでとはうって変わってパスランを主体としたカッティング中心のプレイが繰り広げられていました。おそらくイメージのみで試合に臨んだ場合、その修正に時間がかかり、選手も対応しきれないままで終わったかもしれません。スカウティングがしっかりとできた分、①パスの出所であるボールマンへのプレッシャーを強めること②カッティングへのボディチェックを確実にすること③何をやりたいのか先読みし、相手がほしいと思うところでパスを受けさせないこと、という3点を強調して試合に入りました。

試合は立ち上がりはほぼ互角。途中、栗林が畑中選手にブロックショットされるシーンもあって、やや神居東が優勢に見える面も出てきました。この状況を打開したのが、宗形

の躍動感あふれるプレイと、途中出場ながら攻守に渡って活躍した三浦の存在でした。難敵・神居東を何とか振り切って初戦を突破。結果として、序盤はイーブンの試合展開でも決して焦ることなく自分達のペースを保つことで、ここぞ！という場面で爆発的な力を発揮して相手を振り切るという「勝利のパターン」らしきものができあがり、滝川明苑、北広島大曲、北星女子に勝って、3年連続8回目の全道優勝を成し遂げることができました。いよいよ目指すは日本の頂点です。

7. 全中出場権を獲得した後で

全道大会を終えてから静岡全中までの間、まずは各選手のコンディションをしっかりと整えることが先決でした。幸い、清田中にはトレーナー業務を全面的に任せることができ、田中孝和氏がついてきますので、彼と相談して練習量を定め、選手のボディケアも十分に行ってもらいました。また、金銭的な面での対外的な折衝や現地での連絡調整は、副顧問である作田先生が一心に引き受けて下さり、私はチームの最後のレベルアップに向けて取り組めばよいだけの環境が整いました。しかし、今更ながらこの時期の取り組みで、私が反省しなければいけないと思えることが2つあります。

中体連は負ければそこで終わりですから、全道大会が終了した時点でほとんどの中学生が引退しています。であれば、本来なら高校生に胸を借りてガンガン試合をやって…というのが理想です。しかし、残念ながらこの代は高校生と試合をすると、必ずと言って良いほど誰かがケガをするということが多かったため、全中を直前に控えたこの時期に練習試合をすることには二の足を踏んでしまいました。まずこれが大きな反省点です。やはり、全中に向けて一入絞り上げるためにはワンランク上の高校生と試合をすることが必須です。それでいてケガをしない強い身体を日頃から作っていくことが大切なのだとも痛感しています。道外勢の話聞いても、藤浪なら桜花や安城、時には愛知学泉大と試合をし、2年前に無敵の強さで日本一に輝いた若水に至っては、シャンソン化粧品と試合をしているのですから。

高校生と試合をしない分、いつもながらの男子との練習の中で、ディフェンスの約束の確認、10点ビハインドをはねのけるハンデマッチ、ゾーンやプレスへの対応に取り組み、全中の抽選を待ちました。知っている方も多いでしょうが、全国は9ブロック(北海道・東北・関東・北信越・東海・近畿・中国・四国・九州)あるのに対し、予選リーグは8つ。ということはブロックを1位で通過しても、他ブロックの1位と同リーグになる可能性もあるということです。ましてや開催地区1位もブロック1位と同等に扱われた上に、他ブロックの1位とは同じにならない配慮があることを考えると、8つ予選リーグがある中で2つのリーグはブロック1位同士の対戦があることになります。そういうわけで、今回は九州1位の折尾と同じブロックになり、3チームリーグのもう1校も関東3位の東村山第六との対戦が決まりました。この組合せがHPにアップされた瞬間、悲鳴にも似た感想がチームの内外から私のところに集まりました。しかし、これらに対してしっかりと対応し、

少なくとも選手の動揺は皆無にしなければなりません。今回はまだまだその点が弱かった…というのが2つ目の反省点です。

現在、二島中(福岡県)の山崎先生が木屋瀬中を率いて北海道全中に出場した際、決勝トーナメントの抽選会で優勝候補筆頭の藤田中(大阪府)の真横を引いたときに思わず「ああ…」という心境になったことをコーチとしての弱さだったと述懐しているそうです。結果として、木屋瀬中はあと一步のところまで藤田中を追い込みながら敗退。勝った藤田中はその後順当に勝利を重ねて日本一となりました。その経験があるからこそ、どんな苦しい組合せになろうとも「よし、頑張るぞ!」と自らを鼓舞し、チームの指揮に当たるのだという話に感銘を受けます。私もこの境地に立つと同時に、自分のチームの選手や保護者、状況によっては道内関係者にまでそれを浸透できるように頑張りたいと考えています。

8. 全中の舞台

静岡は札幌とは比べものにならないほど暑かったですが、試合会場となった浜松アリーナは世界選手権の舞台となったところでもあり、冷房完備で快適でした。

予選第1試合は東村山第六と。先に行われた折尾との対戦を見たことで、大体のイメージをつかんで試合に臨むことができました。トップエンデバーにも選ばれているオコエ選手がインサイドの軸となってチームのリズムを築いてくるので、栗林がマッチアップすることでシャットアウトに成功。池田も要所でシュートを決めて、第1ピリオドは23-9と優位に試合を進めることができました。しかし、第2ピリオドに入ると栗林の対角のインサイドである藤原にファウルが混み始め、マンツーマンでつくことが難しく、ゾーンディフェンスに変更を余儀なくされました。その結果、高確率でアウトサイドからシュートを決められ、一方的な試合運びはできなくなりました。

ただ、相手がディフェンスをゾーンに変更したり、オールコートで当たってきたのに対しては、既に準備してきたものがあつたので慌てることなく冷静に対応することができたので、大事な初戦をまずは勝利することができました。関東では前評判の高かった昭和学院や東京成徳が敗れる中、間隙を縫って全中に出場してきたチームだけに、こちらがちょっとでも油断をするとすぐにつけ込んでくる強さがあり、一瞬たりとも気を抜くことはできませんでした。ただ、もしウチに圧倒的な力があれば、同じ頃に行われた男子の試合に駆けつけたかったのがウソ偽りのない指導者としての私の本音です。残念ながら女子の試合が行われていた浜松アリーナと男子の試合が行われているエコパアリーナでは片道1時間移動に時間がかかるため、断腸の思いで男子のベンチから外れました。

この時点で決勝トーナメントの出場は決まりましたが、予選リーグを1位で通過して、2位と当たる組合せにしたい。過去2年間成し遂げられなかったベスト16の壁を、何としても今年は破りたいと考え、折尾との一戦に全てを賭けました。折尾と言えば、全中常連の強豪です。メインで指揮される永井先生は体調を崩されているとのことで、会場には来ていませんでしたが、昔と変わらない襟のついたクラシックなユニホームが伝統校の凄

みを現していました。

試合は役割分担が徹底されている折尾の攻撃パターンに対応し、いかにして清田らしきを出すかが勝敗の鍵を握ると思われました。第1ピリオドはやや押され気味だったものの、何とか食らいつき4点ビハインドで終了。第2ピリオドに入ってゾーンプレスを仕掛けたところ、相手のミスを誘って連続スティールに成功し、2点リードで前半を終えることができました。いよいよここからが勝負。自分達のペースを保ちながら、いけるところで一気に突き放す展開に…と考えましたが、思わぬ誤算が3つ起こりました。

1つ目は審判の問題です。私もかつてはレフリーをしていたので、その難しさは百も承知ですが、後半のジャッジが明らかにぶれ始めました。具体的に言うと、折尾の突き出しのトラベリングが全く吹かれなくなってしまったのです。こうなるとプレスでプレッシャーをかけてもドリブルで突破されやすくなってしまいます。ディフェンスが機能しなくなったことで、次第にペースを折尾に握られてしまいました。審判がこうなってしまったのはもちろん故意ではないでしょうが、強豪・折尾を清田が破るストーリーに付き合うことができなかつたのかもしれない。しかし、たとえそうであったとしても試合には勝たなければダメです。全中を終えてから私は子ども達に「ボクシングの世界タイトルマッチと同じように挑戦者の判定勝ちはない。ノックアウトしか勝つ方法はない。」と言いました。全中の審判のレベルはそれほど高くはありません。このことをもっと意識した取り組みをしていかなければならないと今は感じています。

2つ目の誤算は選手の対応力のなさが露呈したことです。折尾は完全に役割分業スタイルのバスケットボールだったので、ポイントを絞るのはそれほど難しくはないのですが、接戦の中で子ども達もいっぱいいっぱいになってしまったのでしょう。「なぜ、そこを空けてしまう!？」と叫んでしまう光景が多々出てしまいました。正しくバスケットボールを考え、相手との駆け引きを楽しむレベルにまで到達しないと、全中の舞台で戦いきることはできません。北海道にいと、どうしても同じチームとばかり試合をしてしまうことになりませんが、それによって身に付くことと身に付かないことを判別し、初対戦の相手にもすぐアジャストできる選手を育てていかねばならないと感じました。

そして、最後に3つ目の誤算。それは選手が自分達のリズムを狂わせてしまったことです。相手にどうやられようと、審判にどう判定されようと、自分達の持ち味を最後まで発揮できないようでは全中で勝つことは難しいということです。この試合を振り返ると、1Q 18-22、2Q 21-15、3Q 13-19、4Q 12-20となっており、折尾は自分達のペースを崩さずに試合運びをしているのが一目瞭然でわかります。また、2ピリオドでプレスにはまった際も、完全に修正して(審判の判定が有利に作用したとしても)すぐに立ち直っています。一方の清田は後半失速。最後はイージーシュートもリングに嫌われてしまいました。このあたりの粘り強さを身に付けさせるのも全中で勝つ必要条件なのだと考えています。

結果として12点差の敗退。悔しさで胸一杯でしたが、すぐ会場を後にすれば男子の試

合の後半には間に合うかもしれない…と考え、ミーティングを簡単に済ませた後、浜松アリーナを一人飛び出し、男子の試合会場であるエコパアリーナへと向かいました。

決勝トーナメントの抽選の結果、関東1位の所沢山口との対戦が決まりました。予選リーグで北星女子を破っているチームです。抽選会の帰りに北星女子の小師先生から詳しくプレイスタイルを聞き、東日本選抜大会で懇意にさせて頂いている猿橋中(新潟県)の五十嵐先生からはDVDを頂くことができました。かつて、前夜のミーティングを綿密に行った結果、意思統一は図れたが、就寝時間が遅れた分、選手の動きが重く感じたことがあります。そこで、長い時間をかけずにポイントを絞って話し、部屋にはすぐ戻しました。この時に洗濯に出したユニホームが1枚ない…というハプニングも発生しましたが、四方八方手を尽くした結果、事なきを得ました。

いよいよ勝負の所沢山口戦。第1試合だったので、アップからコートで気合い十分に行っていたところ、いきなり大会本部から呼び出しを食らいました。何のことかと思えば、トレーナーはベンチの所定の位置から一步も動いてはいけません。よって、アップの指導をするなど有り得ないことで、大会規定に基づき永久追放させることも考えているというものでした。試合開始前にいきなり鼻っ柱を折られるような発言にかなりムッとしましたが、本来のトレーナーのあり方を議論する前に、まずは田中トレーナーの立場を守らなくてはと考えてベンチの片隅にいてもらうことにしました。ちなみに、その後田中トレーナーが試合中に手を叩いたり、声を出しても大会関係者が飛んできて「余計なことをするな!」と注意したようです。男子決勝に出ていた地元・浜松学院のトレーナーは思いきりベンチの横で応援していましたが…。私もかなり鈍感でしたが、この時になってようやくうちにとってはアウェイの土地で試合をしていたということに気づきました。気づくのが遅すぎでした。もっと艱難辛苦の状況を想定して全中に入るべきでした。この時ほど自分のお人好し加減に嫌気がさしたことはありません…。

選手には水面下でそのようなことがあったことを悟られないようにして、試合は始まりました。立ち上がりは宗形、土岐のシュートが決まって清田ペース。しかし、気負いすぎている分、もう一本決めておきたいシュートを外してしまい、そうこうしている内に所沢山口の反撃を食らいます。残念だったのはわかっていたにも関わらず、相手の得点源である⑦⑩にみすみすシュートを打たせてしまったこと。また、リバウンドで圧倒されてしまい、特に相手にオフェンスリバウンドを奪われてセカンドチャンスが簡単に与えてしまったのは痛すぎました。

結局、折尾戦と同様に対応力のなさが露呈してしまい、大会優秀選手にも選ばれたシューターの⑦に3ポイント8本を含む39得点を奪われ、トップエンデバーに招集されている⑩には22得点と、75点奪われた内の大半を2人に取られました。そして、その根底となったのがリバウンド勝負に負けたことでもあります。これも相手の特徴を早めにつかんでアジャストできれば解決できた問題ですから、正に残念の一言です。

また、栗林に対する所沢山口の手を使ったディフェンスも全くファウルと判定されず、

この点に関しても折尾戦と同じでした。現在日本代表のアソシエイトコーチであるトーステン・ロイブル氏と話をさせてもらった時「レフリーとコミュニケーションを取って試合の判定基準を明確にしていくのはコーチの仕事。」と言われたのを思い出します。テクニカルファウルを取られるような抗議をするべきではありませんが、いかにしてこちらの思いを審判に伝えつつ、審判に判定基準がどこにあるかを探るという点では私は未熟だと悟りました。この辺りも選手には申し訳なかったと思います。

それでも選手たちは最後まであきらめず、プレイを続け、藤原が14得点、宗形が15得点を叩き出し、終了間際に船水が3ポイントを決めることができました。結果は58ー75。3年連続の全国ベスト16で、この代の挑戦は終わりました。なお、所沢山口はベスト4に入ったことを付記します。

終わりに

女子を率いて全中に出て3年目。勝つポイントが次第にわかりつつも、出るたびに底知れない全中のレベルを知らされます。しかし、結局はファンダメンタルを徹底し、正しいバスケットボールのあり方を理解してプレイするという。それらを他ならない選手がコート上で表現することができれば、全中で勝つことはできるのだと考えます。

もちろん「言うは易し、行うは難し」で、ありとあらゆる手を使って日本中のコーチが苦心しているのでしょう。これほどまでにいいチームを持ちながらも勝てなかった自責の念は大変強いものがありますが、そこでとどまっていたは選手たちに申し訳ありません。「勝てなかったのはコーチの責任」という言葉を十分に噛みしめて、これからも日本一への挑戦を続けていきます。

最後になりますが、清田中学校バスケットボール部の諸活動に対し、ご理解とご協力をして頂いた全ての方々に感謝し、今夏の全中の報告とさせていただきます。